

## カルロス・ウスカンガ 「メキシコ・日本 130 年の外交関係:3つの歴史」について

愛知県立大学外国語学部ヨーロッパ学科スペイン語圏専攻  
小池康弘

1888年11月30日、米国ワシントンにおいて「日墨友好通商航海条約」の調印式が行なわれた。日本にとって最初の「平等条約」とされる同条約の調印式には、日本政府を代表して陸奥宗光駐米全権公使(後に外相)、メキシコ政府を代表してマティアス・ロメロ(Matías Romero)駐米大使が出席、署名した。本論文は、日墨外交関係が公式にスタートしてから130周年となるのを機に、メキシコ国立自治大学国際関係研究センターのカルロス・ウスカンガ(Carlos Uscanga)教授が本誌に寄稿したものである。

本論文において焦点があてられているのは、1900年代初頭における両国関係である。メキシコ革命(1911-1917)の動乱期に、日墨関係においては何が起こっていたのだろうか。ウスカンガ氏はそこに焦点をあて、メキシコ革命という状況および当時の日墨米3カ国の関係にも注目しながら、従来明らかにされてこなかった歴史を紐解こうとしている。

メキシコ革命政府と反革命勢力による闘争が続いていた1913年2月、革命政府のフランシスコ・マデロ大統領が、ビクトリアノ・ウエルタ将軍(反革命派)によるクーデターで殺害された。ウエルタが権力の座につくと、マデロの家族に危害を加えられることが懸念された。その時、彼らの庇護において重要な役割を果たしたのは、日本人外交官、堀口九萬一(ほりぐち くまいち)駐メキシコ臨時代理公使だった。彼はマデロの家族を保護するとともに、ウエルタ政権に対して、家族に危害を加えないことを約束させた。この人道的行為は、後にメキシコにおいて賞賛され、2015年には共和国上院議事堂に彼を称える銘板が設置された。ウスカンガ氏の論文では、このエピソードを紹介した上で、1913年から1914年頃の日墨米の関係と当時の日本政府の対メキシコ外交の動きを、主に3人の人物に焦点をあてながら説明している。その3人とは、堀口の後任として駐メキシコ公使となった安達峰一郎、メキシコにおける日本人移民の受入状況を調査するため政府から派遣された京都帝国大学教授の末廣重雄、そして3人目は、「メキシコにおける定例の海軍演習」との名目で戦艦出雲の艦長としてメキシコに派遣され、実

際にはメキシコ情勢や日本人移民の安全、ウエルタ反革命政権の安定性などの調査を行なった帝国海軍大佐、森山慶三郎である。

米国による日本人移民の排斥という時代状況の中で、安達は国際的に孤立していたウエルタ政権に武器供与(革命勢力封じ込めのため欲していた)と引き換えに「10万人の日本人受入れ」を表明させ、メキシコを新たな移民先として推奨する一方、末廣教授の調査を最大限利用した。安達はウエルタの足元を見ながらメキシコから妥協を引き出し、対米交渉でも有利に立てると考えていたのである。それに対してウエルタ政権の安定性に懐疑的だった軍人の森山は慎重な立場であった。日本外交史としても興味深い論考である。